

主催団体特別賞

「トマトのスライスに塩？砂糖？」

ソン リイ (孫 利偉)

Mr. Sun Liwei
(中国・会社員)

大連外国語学院で日本語を勉強し、卒業後日本への留学を決意。2006年10月に来日、大学院での研究生活後、2010年4月日本の民間企業に就職。
国際交流というのは私たち人間同士の会話から生まれるものだと思います。



日本に来てから早くも四年間が経ちました。

四年前、中部国際空港から出た私は日本の街を見て、「なるほど、ほんとにきれいなあ」と思いました。大学では日本語を専攻し、日本語、そして日本の社会や日本の文化などについて勉強してきました。さらに、大学3年生の時には、日本の茶道の授業も受けました。そこで知った「和、敬、静、寂」という茶のところに惹かれ、大学を卒業した後、日本への留学を決めました。留学が決まったときに、日本人の先生から、日本の街はきれいだと言われました。中国では街の道路などを掃除する人までいるのに、なぜ街がきれいにならないのだろうと不思議に思い、日本は中国と違うんだと肌で感じました。

このように、私の日本での留学生活が始まりました。ある日、日本人の友人を誘って、私の家に遊びに来てもらいました。簡単な手料理を振舞ってもてなしたいと思い、私が普段よく食べる中華料理を作りました。いつもどおりトマトをスライスして、その上に大量の砂糖をかけました。テーブルに出したら、「おい、孫君、塩かけすぎでしょう」と笑われました。「塩？」と一瞬、私は戸惑いました。「いや、違うよ、それは砂糖だよ」と言うと、「うそっ！」と友達がびっくりして、私もびっくりしました。その後友達から聞いたのですが、日本ではトマトのスライスに塩をかけるのが定番だそうです。ちょうど一個トマトが余ったので、それもスライスして今度は塩をかけました。二人で食べ比べた結果、どちらも意外な味がするけれど、どちらも美味しかったです。そうか、日本は中国と違うんだなあともまた強く感じました。

やっぱり日本は中国と違うんだと感じた時に、大学時代に起きたあるエピソードを思い出しました。大学時代のある日、私は一人の日本人の友達と一緒に公園に行きました。夏が近づいてきた頃だったので、昆虫が元気にあっちこっちを飛んでいました。日本人の友達は私と日本語で話しながら、一つの小さい花を写真に撮ろうとしていました。そばにいた人は、「日本人はつまらないなあ」と中国語で言いました。「そうかな」と私はころころの中で疑問符を打ちました。日本人は考えが繊細で、いつも物事の細部まで十分に気を配ります。それとは対照的に、中国人はあまり細かいことを気にしないのが普通です。そういう違いなどはそれぞれの文化をある程度知らないと、どうしても分からないものです。

そうです、分かりました。この四年間を通じて、ようやく分かりました。違うからこそ、お互いによりよく

知りたいと努力するのです。違うからこそ、お互いにより深く知り合って、交流を深めるべきだと思います。日本の街がきれいなのは、日本人の一人一人の努力のためなのだと分かりました。家の近所のおばあちゃんやおじいちゃんは毎日自分の家だけではなく、近くの道路も掃除しています。トマトのスライスに砂糖をのせるのではなく、塩をかけて食べるのも美味しいと分かりました。そして、自分が勤めている会社ではミクロン単位で自動車の部品を加工し、寸法の誤差もミクロン単位で計算しています。このような日本人の繊細なところと緻密な作業があったからこそ、「Made in Japan」というブランドが成り立ったのだと分かりました。

違うからお互いに触れ合うのを怖がって、相手を遠ざけていると、お互いの間の距離はだんだん広がっていくのです。そうすると、私たちが日々提唱している国際交流や国際社会はいつになっても実現できないでしょう。「地球村」という概念が世界中に知られるようになった今日、私たちは努力して、その距離を縮めるべきだと考えています。桜の花と牡丹の花は色や形などにおいていろいろ違うけれど、お互いに違いを認めて共存するのが一番の選択ではないでしょうか。そして、世界中の様々な花をきれいに咲かすことで真の国際交流、真の国際社会はきっと実現できると私は強く信じています。